

「地震の原因と観測に関する推論」なかでもリスボン大地震について」の執筆にあたりジョン・ミッチェルが依拠した主要な史料のひとつ、『英国王立協会哲学紀要』には一七五五年の津波・地震のほか、それに先立つジャマイカ地震、ペルー地震、ロンドン地震の記録も含まれる。なかでの一六九二年のジャマイカ地震をとくに重視し、同論文の終結近くでは当該の記録を多く引用した。

ミッチェルの主な関心は地震の自然科学的側面にあるが、ジャマイカ地震については他の記録もかなり保存され、その社会的・精神的側面についても注目すべき事柄が見出される。以下解説を付しつつ、この災害に関する記録を訳出する。

第一章 自然学者スローンによる震災証言集録

一 『英国王立協会哲学紀要』におけるジャマイカ地震一

一六六〇年に生まれたハンス・スローンは若くして植物学や薬学に関心を抱き、のちには医学を修めた。医家としては貴族社会で信望を得るとともに、アン女王をはじめ三代の英国君主に仕える。一六八五年彼は王立協会の会員に選ばれて、二十年間『哲学紀要』の編集を担当したあと、一七二七年から一七四一年までニュートンの

後任として同協会会長の要職を務めた。^①

一九九四年刊行の『哲学紀要』第十八巻にはつぎの表題で九通の地震報告が収録される。「一六八七年十月二十日ペルーにおける地震および一六八七年二月一九日・一六九二年六月七日ジャマイカにおける地震の報告若干を含む王立協会会員ハンス・スローンの書簡」^②。ここではまず全体の解題が付され、一六八七年ペルー地震に関する第一の報告とスローンによる一六八七年ジャマイカ地震に関する報告のあと、一六九二年の激烈なジャマイカ地震について六件の報告が提示される。「各位殿。ここに同封する書類は」と彼は冒頭で述べる。「複数なる地震の報告と相異なる多くの観察を記載し、王立協会の会合で会読されたものである。ここに記録された震災の規模と付随する事柄は多大であって、保存して後世に寄与すべく完璧な形態で公共に供したい。」ペルー地震の報告は別途扱うとして、ここではまず彼自身による一六八七年の被災体験を検討しよう。

一六八七年ジェームズ二世は王政復古に功績あるアルベマール公爵の子息クリストファーをジャマイカ総督に登用し、その侍医にスローンが任じられた。九月十二日彼は王室護衛艦アシスタント号でポートマウスから出発し、ポルトガル領マデイラ諸島や西インド諸島バルバドスを経て、十二月十九日ポート・ロイヤル港に到着した。

^① Sir Hans Sloane, *the British Museum*, online.

^② Hans Sloane and Alvarez de Toledo, A Letter from Hans Sloane, M.D. and S.R.S. with Several Accounts of the Earthquakes in Peru October the 20th 1687. and at Jamaica. February 19th. 1687/8 and June the 7th. 1692.

Philosophical Transactions (1683-1775) Vol.18(1694), pp.78-100. Royal Society.

公爵の急逝によって同地での駐在は十五カ月に止まるが、一六九二年大震災の前触れとも言うべき震動にこのとき遭遇した。なお、カリブ海での成果を後年彼は『ジャマイカへの航海記』（厳密には『マデイラ諸島、バルバドス、ニエヴェス、サン・クリストファーズ、ジャマイカへの旅』として刊行し、そこには詳しい航海日誌や現地の地誌とともに、観察した膨大な植物の解説と図録が記載される。①

〔報告第二〕一六八八年二月一九日曜ジャマイカで発生した地震の報告。現地に居合わせた

ハンス・スローンの執筆による。

ジャマイカの住民は毎年地震にも脅える。大雨のあとにそれが襲うと説く者もある。地震のひとつが一六八七年二月一九日に発生した。午前八時頃一階の居室で筆者は、あたかも建物の土台が持ち上げられるかのようになり、飾り棚や他の家具が揺れるのに気づいた。何事かと窓辺によって見渡すと、頑丈な鳥小屋で鳩などの鳥類が驚愕して翼を上げ、飛翔もできず、凝固したままであった。異変が起き、煉瓦造りの高層は危険と悟って、急いで戸外へ出ようとする。だが、二部屋ほど通り抜け、階段まで来ると、揺れは止まった。地震が発生したのである。僅かな休止を挟み、震動は三度あった。いずれも一分程度にして、微かな噪音を伴う。

① Hans Sloane, *A Voyage to Jamaica, (A Voyage to the Islands Madra, Barbados, Nieves, S. Christophers and Jamaica, with Natural History.)*. London, 1707. Volume 1, pp. 1, 47.

W. J. Gardner, *A History of Jamaica, from Discovery by Columbus to the Present Time* London, 1878, pp.69-70.

二階では棚から多くの物が落下し、上方の階ほど被害は大であった。この地震は島の全土でほとんど同時に感知された。多くの家屋が破壊されて荒墟となり、屋根瓦の剥がれた家もあって、被害を免れたのは少数である。地に足が就かぬのを感じて、だれしもみな恐慌状態に陥った。ポート・ロイヤル港の船舶もやはり揺れた。おりしもヨーロッパから来た人物は、島の東方でそのときハリケーンに襲われたと言う。馬上にいた人物は震動を感じなかった。所有する農園の近くである貴紳は、地震が襲来し、北方へ通過する間、波動する海洋のように大地が隆起したと筆者に語る。この震動を感じてまもなく、数マイル離れた丘で樹冠が揺れ、そこまで震動が達したことを知ったのである。ジャマイカ島やその周辺に住むスペイン人は平屋しか造らなかつた。それらは一階の部屋だけで構成され、障壁は地底に据えた支柱で護られる。かくして彼は他の様式における建物を避け、地震による危険を防ごうとする。山岳地帯で放置された裸地を私は見たが、それが地震の衝撃で丘陵から脱落し、荒れ果て不毛であると住民から知らされた。①

カリブ海に位置するジャマイカは、全島の面積約一万一千平方メートル、徳島県と高知県を合わせた範囲に近い。西インド諸島ではキューバ、エスパニョラについて第三の広さである。紀元八〇〇年頃この地に渡来したタイノ族は、南米各地に居住したアラワカン語族の分派と思われる。漁業とともに農耕を営む彼らは、首長のもと六万人に達したとされる。一四九四年コロンブスは第二次航海の際この地上陸し、やがてスペイン人によって植民地とし

ての建設とサトウキビの栽培が開発される。彼らは多くのタイノ人を奴隷としたが、あるいは山奥へ逃亡し、あるいは伝染病で死亡し、過酷なアフリカ人奴隷の導入が開始される。十七世紀の初頭ジャマイカの人口はほぼ三千人と推定され、少数のアフリカ人奴隷を含んでいた。ピューリタン革命を達成したクロンウェルは、スペインとの抗争のなかで、西インド諸島へ艦隊を出動させ、一六五五年ジャマイカを占領した。その五年後マドリッド状約によって正式にこれを取得し、防衛と交易に絶好の地、ポート・ロイヤルを首都に定める。①

やがて王政復古で即位したチャールズ二世はジャマイカでの植民地建設を本格化し、すべての住民にイギリス王国の法制を適用すると宣言し、統治者たる国王の代理人として初代の総督エドワード・ドレイレイを任命した。②一六八七年からここで奉職したスローンは、ジャマイカとポート・ロイヤルの地誌をつぎのように誌す。

「ジャマイカの全島中央には東から西にかけて一連の山脈が走り、晴天の蒼空に映えることからこの山並みがブルーマウンテンと総称される。」「同島は熱帯に位置するものの、通年夜の長さがほぼ十二時間に及ぶため、昼間の熱気が緩和され、快適な大気となる。」「ポート・ロイヤルは砂地の岬に位置し、そこからリガンズへ砂地の狭い地峡がほぼ三マイルにわたり走る。この都市にはきわめて好適で安全な港が築かれ、陸地と浅瀬であらゆ

① History of Jamaica, *Encyclopedia Britannica online*.

② Edward Long, *The History of Jamaica*, London, 1774, volume 1, pp.9-12.

この書物は差別的なニグロ観を説いたとして古来非難されるが、イギリス統治下におけるジャマイカの統治組織については詳細である。

る強風から護られる。」「この都市は約千五百の建物から成り立ち、それらはまず木材で、のちには大半が煉瓦で建造された。イギリスの艦隊でここに来る船乗りや軍人の便宜のため造られたのである。」「また、ポート・ロイヤルの海辺では忘れ得ぬ光景にも接した。」「売るための黒人を乗せて、ギニアから来た船を私はこの港と岸辺これなる港と岸で私は見た。この船は彼らを満載し、非常に不潔である。黒人はインディアン落花生、すなわち地下に生える豆類を食べると聞く。ギニアからここへ運ばれ、彼らは日に二度、午前八時と午後四時にこうしたナッツ、インディアン穀類を供され、一杯の水を与えられる。アンゴラとガンバから来た黒人は虫に平気であるが、黄金河岸からの者は非常にこれを気にする。」「① これらの記述は十八世紀初頭に刊行される著書『ジャマイカへの旅』の緒論に含まれるが、大地震以前の様相を描写したものである。

スローンがジャマイカから去って三年後、一六九二年六月七日に大地震が勃発した。一九五〇年代に行われた水中考古学の調査によれば、発見された遺物のなかに停止した時計が含まれ、地震発生の瞬間は午前十一時四三分やや前と推断される。別の証左では震動の長さは十五分、ながくとも三十分であった。② 王立協会に供された地震報告の第三から第五までは、これなる大地震の証言であり、主としてポート・ロイヤルについて比較的早い時期に書かれた。

① Sloane, *A Voyage to Jamaica*, Volume, pp.viii, lviii, lxxiii.

② Mathew Mulcahy, *The Port Royal Earthquake and the World of Wonders in Seventeenth-Century Jamaica*, in *Early*

〔報告第三〕 ジャマイカに在留し、一六九二年六月七日怖るべき地震に遭遇した人物の書簡抜粋。

ポート・ロイヤル港において彼自身が体験し、その従僕も目撃した出来事の報告。

ジャマイカ、一六九二年六月二十日

(一六九二年六月) 七日午前十一時より十二時の間に発生した怖るべき地震は、ポート・ロイヤル市街十分の九を二分間で壊滅させ、波止場一帯のすべてをも一分足らずで破壊しました。被害を免れた人は稀であって、私自身もすべての人材と財貨、わが妻とふたりの従僕、B夫人と彼女の娘を喪いました。逃れてきた白人の小間使が私に告げました。二階の居室にいた女主人が屋根裏部屋へ登り、そこでは地震を知ったB夫人とその娘が子どもを抱いて駆け降りるよう命じます。だが、振り返るや、屋根裏の階段にまで津波が迫り、家屋が沈下してはや三十フィートほど水中にありました。その朝私と息子はリガーニアへ出掛け、ポート・ロイヤルとの途中で地震に襲われました。そこでは風もないのに、怒濤が水面から六フィートもの高さに荒れています。神慮に救われてリガーニアへ引き返すと、すべての家屋が倒壊し、黒人の家を休めるところが皆無でした。この地震は二四時間に五回か六回繰り返し、山岳の大きな部分が日々崩れ墜ちました。私たちがなお怖れる峻厳な判断を、なにとぞ転じてくださるよう神に祈ります。

〔報告第四〕 一六九二年ジャマイカからの書簡抜粋。ジャマイカ地震に発する病患とその原因に
関して。

私たちは(日々小さな震動に脅えています)かの大地震以来死亡率の激増を憂いております。すなわち、ポート・ロイヤルから逃れた人々のほぼ半数が、大気の変化、乾燥した住居や暖かな部屋の欠如、さらには医薬と用品の欠乏による悪性の熱病のため、死亡しました。

〔報告第五〕 別の人物による一六九二年九月二十日付書簡の抜粋。同じく六月七日の怖るべき地震を報告する。

ジャマイカ、一六九二年九月二十日

今次の大震災については勿論すでにお聞きになったでしょう。だが、私も可能なかぎり詳細をお伝えしたいと存じます。まずはポート・ロイヤルの大半が沈没しました。埠頭が位置したところは、いまや深淵です。教会付近の通路もすべて氾濫し、上階まで水浸しになりました。大地が亀裂して人々を呑み込み、港湾の中央では道路が隆起しながら、逃れた者もあります。とはいえ、白人と黒人合わせて約二千名が一気に歿したと思われます。北部では千エーカーの土地と十三人が水没したのです。全島の家屋すべてが倒壊して、私たちは余儀なくあばら屋で暮らしています。十六マイル岨道の入口にあたるふたつの山が崩れて繋がり、河流が止まり枯渇したため、そこへのフェリーは終日休止しました。ただし、大量の魚類が捕獲され、困窮者の大いなる救いとなります。テロウでは大きな山が割れ、平地へ崩れ墜ちてあちこちの新開地を覆い、白人十九名の命を奪いました。①

これらのうち病死者に係わる〔報告第四〕は数行にすぎぬものの、スローンは医家としての関心からとくに収録したと思われる。彼の著作『ジャマイカへの旅』の主体は前述のとおり植物誌であるが、緒論の別枠として長文の診断・治療記録が付せられる。ここでは同島駐在中に滞在中に診察した事例百四十以上が綿密に記述され、なかでも黒人男女の病状や風土病への対応が注目に値する。本稿の主題から逸脱するのを懸念しつつ、知られざるこの記録から若干を紹介する。「黒人の少年ジョン・ヤングスは」とスローンは書く。「ほぼ十二歳にして伝染病マラリアを患い、症状がほとんど止まなかつた。いつものとおり私はペルー産樹皮を与える。彼は大量の虫を排出し、完治した。」こうした疾患や障害は亜熱帯特有の風土だけでなく、生活と労働の過酷な条件にも起因する。「農園の黒人や原住民は自分や子どもの寝台近くに暖炉を置く。健康を護るためでもあり、ブエヤ蚊やハエを駆除するためでもある。通常奴隷は苦役に追われ、夜は熟睡して容易に目覚めない。こうした若者がとくには暖炉に触れ、手足を火傷する。かならず私は玉ねぎの湿布、食塩、混合スープを処方したが、これらはどこでも用意でき、そうした怪我に卓効を示す。」「ギニアから最近来た頑丈な黒人ひとりが熱帯性覆盆子腫に侵され、小さくは留め針の頭、大きくは豆粒ほどに発疹して、ついには皮膚の分泌腺が膨れて白味を帯びる。大きくなると腫れものの上部は白くなり、角皮と体液が部分的に通常乾燥して、かさぶたも浮かび、ときには膿も出る。こうした潰瘍が相当大きな症状もある。往々にして骨髄の激痛を訴え、私の治療したある患者をば陰茎や陰囊や両肘の発疹と診断された。彼には納屋で軟膏を塗布し、薄いお粥をできるだけ沢山食べさせる。この処方が必要不可欠であつて、不潔な疾患から彼は完治したのである。ただし、片肘の腫れがまったくは乾かず、焼き硫酸塩の投与でかさぶたを退散させ、全快に導いた。この疾患は伝染病とみなされ、黒人から白人へ、親から子へとつぎつぎにが感染する。疱瘡ほど染り易いか否かは不明であるが、大抵の農園ではこうした患者が数名発見され、その都度上述の処方で行った。」①

翌年書かれたふたつの報告では、ポート・ロイヤルの模様とともに、他の地域における被害も証言される。

〔報告第六〕一六九二年六月七日の地震に現地で遭遇した貴紳による一六九三年三月六日付書簡の一部。
彼自身の体験と他者からの聴取報告。

このたびのジャマイカ地震について知りたいと思われる事柄について、私の見聞をできるだけ忠実にお伝えします。ポート・ロイヤルに私は居住し、そこでの体験から始めます。一六九二年六月七日火曜の昼十一時から十二までの間居酒屋にいて、家屋の揺れを感じて、床では煉瓦の隆起に気づき、同時に街路から「地震だ！」との叫びが聞えました。ただちに戸外へ逃れた私たちは、だれもが両手を挙げて、神の救いを哀願するのを見ました。街路を駆け続け、両側の家屋があるいは波浪に呑み込まれ、あるいは倒壊するのが映じます。街路の土砂は海面の波動のごとく盛り上り、足踏みする全員を亀裂に突き落すのです。そこを怒濤が襲い、哀れな人々をつぎつぎと巻き込みます。ある者は住居の梁や樽に縋り、引き潮のあと他の者は四肢を欠くまま砂中に発見されました。こうした凄惨を光景を見詰め、私たち十六名ないし十八名が立ち続ける小

さな地所は（神護により）沈没を免れます。激しい震動が消えるや、家族が無事であるか否かを、だれもが知ろうと望みます。水上に漂う家屋の廃残を乗り越え、私もわが家へ向かったものの、為しえません。なんとか小舟を確保して、一面海のなか自宅へと竿さしつつ、漂流する難破船に数人の男女を見つけ、その多くを小舟に受け入れました。わが家の位置と思われるところまで漕ぎましたが、妻からも家族からも応答がありません。そのため前述の沈没せぬ地所へ引き返しました。しかし、だれもが島へ戻ろうと懸命であり、同じく私も妻と家族の安否を知りたいのでは、どうにもなりません。翌朝船から船へと探しまわり、神護なるかな！ ついにわが妻とふたりの黒人を見つけたました。いかに逃れたか、とそこで彼女に聞きました。「家屋が揺れるのを感じて、すぐに跳び出し」と応えます。「残りの皆に叫びました。一緒に逃げて！」妻が出るやいなや、砂塵が巻き起り、黒人の女性に支えられつつ、ふたりとも地上に倒れます。その瞬間押し寄せた津波にあわや流されますが、ひとつの角材に縋って握りしめ、やがて小舟でスペイン船まで運ばれて助かったのです。

ジュー・ストリート・エンドからブリーストワークに至る建物は、水没を免れたバルコニー八棟ないし十棟を残してすべて倒壊しました。そして、激しい地震が過ぎるや、水夫や船員が家々の掠奪に走ります。彼らの一、二名は掠奪のさなか第二の地震で転倒し、即死しました。

激しい揺れが遠のくと牧師は、祈祷に参加するよう全員に命じました。ひざまずく人々のなかにはユダヤ人も数名含まれ、やはり祈ると応えます。彼らもイエス・キリストの名で唱えるが聞えたそうです。注目すべき光景です。

数艘の船舶と軍艦が港で転覆し、破壊されました。カレン埠頭に停泊すつ護衛艦白鳥号は激しい津波と埠頭の沈没で多数の建物の上に横倒しとなりました。ブーケ様が住む邸宅をもちかすめ、居室を脅かすのですが、彼女は狼狽せず、数百の人たちを助け、彼らの命を救いました。

大気に現れたと噂される火の玉については、真つ赤な嘘であります。（地震のあと数カ月を経たいままで）それらしきものを見もせず、聞きもしません。とはいえ、山岳部で凄まじい轟音が耳を聳しました。そのため恐怖する多数の黒人が所有者のもとから脱出し、まもなく連れ戻されて、今後逃亡せぬと約束しました。アシュボン様およびリガーニアのクエーカー信者ピンノック様と一緒に、私はソルトバンヌ丘陵に発する洪水を目撃しました。丘陵から（おそらく）二十ないし三十もの地域へは奔流して、多くの水門が一気に流失しました。それほど激しくないところ、丘陵の麓でも六ないし七ヤードの高波となりました。私たちが目撃した若干は山岳部において十ないし十四ヤードの高さまで荒れました。こうした驚愕すべき光景に接して立ち尽したのです。かくして私たちはほとんどの地域で洪水を体験し、それらがみな黒味を帯びるのに気づきました。その理由も把握できず、洪水の源も判りません。午後も夜間も、さらには翌朝の日の出まで溢れ続け、ついには塩田も水浸しとなりました。これで洪水の作用もお判りでしょう。塩田と山岳のいずれについてあなたはよくご存じだからです。

ご記憶かと存じますが、古都スパニッシュ・タウンから十六マイル岨道へ至る山峡では河岸に道路があつて、途上の両側、とくに川沿いはほとんど垂直をなしています。激烈な震動によってふたつの山が結合し、河の流れを止めました。抑止された河流は森林と草原に氾濫し、九日間都市にはなんの救援もありません。ポート・ロイヤルと同じく沈没するとおののき、人々は救援を待たず、田園への避難を思案します。河沿いの山が膨大な土塊を落としたため、だれしも余儀なくガナボアから十六マイル岨道まで歩きました。

地震のあと私と妻は島でボスビ様のもとへ身を寄せました。この方も奥方とともに奇蹟的に脱出されたのです。その午後大農園へ来て、地面の数カ所に亀裂を見つけ、二頭ほど乳牛が墜ちて窒息した、と話されました。

地震ののちかなり暑い天候になりました。大群の蚊が発生し、同島への定住以後なかった現象とされます。ガレスの山々も十六マイル歩道のそれらと同じく破壊されました。大きな部分が崩れ、林立するすべての樹木が落下しました。山麓では大農園が土砂を浴び、下に埋もれました。

重要な事柄をいまはこれ以上想起できません。

〔報告第七〕 同じ貴紳による追伸抜粹。地震のさらなる報告。

デイン、一六九二年三月二日

リガーニアの山岳についてとくに険しい峰々がいくつか崩れました。ただし、最高峰が崩れたものの、ガローにおいて甚大な被害はないようです。

危惧された海水の噴出がポート・ロイヤルの街路ではなかったようです。だが、激烈な震動によって数カ所が亀裂し、居合わせた人たちが沈没します。砂地から熱湯が吹き出て、多くがこれを浴び、他は逃れました。河川と都市について書いた事柄で、自身の目撃でないものもあります。いくつかの記録によれば、河

が都市に至るまでに、八日ないし九日経過したようです。①

これらふたつの震災報告ではポート・ロイヤルとともに、内陸部のリガーニアや十六マイル岨道についても語られる。かつてジャマイカ在留中のスローンは、自然学者としてこの地域をも視察した。「十六マイル岨道、すなわち溪谷サン・トマスへ来た。雨季は別として毎朝八時か九時頃霧が立ち籠め、陽が昇ると消える。この霧が害にはならぬ。道の片側は川岸であって、コブル川が流れる。ここではアーチの下、石畳の上をも通る。丘陵あるいは岩山も聳え、少なくとも垂直二百ヤード以上にわたり灌木があちこちに茂る。」「この島の十六マイル岨道や他の農園で栽培されるジャガイモは成長が良いので、繊維を取り除いて食用に供し、茎や葉は豚に与える。」景勝の地十六マイル岨道とともに、リガーニアはポート・ロイヤルに比較的近い地域に位置し、穀物や果樹の栽培が盛んな山地であった。「リガーニアへ赴いたとき、山間にヘリソン大尉の農園、同島随一のヨーロッパ風植物園があると聞いた。自然学にも料理にも趣好にも望ましい施設である。高地であるほど清涼であって、溪谷よりも山岳のほうが一般に降雨や夕立に恵まれるため、当地の条件が野菜の生産に好適なのであろう。」このような農園で栽培される植物を四十種以上枚挙したあと、スローンはさらに述べる。「五月十九日にはクルー大佐の農園へ行った。雨のあと粘土色と赤色のエンドウを植え付けるところである。何人かの黒人が掘り起し、やや後から別の黒人がエンドウを穴に蒔いて、ふたたび土で覆った。害鳥に食われぬよう、二フィートの間隔で育て、

二カ月後に成熟したものを乾季に収穫して、イギリスにおけると同様、茹でて食べる。」① これらの景観が大震災によって崩潰するとともに、大半の農園が壊滅したことは容易に推察できる。

長文である報告第八の執筆者クリストファー・ラヴ・モーレイは、若くしてヨーロッパ各地を旅行し、ライデン大学で医学や化学を修めた。彼が遺した膨大な聴講ノートは同大学の学風や講義を知る貴重な資料とされる。伝染病に関する著書により彼はカレッジ・オブ・フィジシアンの名誉会員に推挙された。ジェームズ二世の恩顧を受けたため、名誉革命以降は公職から退くが、大地震のあと一六九三年までに彼はジャマイカへ旅し、被災者の証言を収集したとみられる。②

〔報告第八〕ジャマイカの貴紳による一六九三年七月三日付友人宛の書簡抜粋。地震のとき居合わせたのではないが、他者の証言を熱心かつ忠実に記録したものととして、非常に興味深い。クリストファー・ラヴ・モーレイ博士の提供による。

ポート・ロイヤル、ジャマイカ、一六九三年七月三日

〔報告第八〕その一

ジャマイカにおける一六九二年の気候は、非常な乾燥と暑気が五月まで続き、月末には荒れた天気と多量

① Sloane, *A Voyage to Jamaica*, pp. lxxiv, lxxiv-lxxvi.

② Morley, Christopher Love. *Dictionary of National Biography*, 1885-1900. online.

の降雨となつて、その後地震の当日はきわめて暑く、無風の乾いた日であつた。その後ほとんど雲もなく、風も感ぜず、陽の照りつける六月七日火曜、きわめて暑く眩しい午前十一時四十分頃大地震が勃発した。この異変は当地ポート・ロイヤルをはじめジャマイカ全島を破滅させ、その激烈さと災害によって世界における過去最大の地震にも比肩し、未来の世代に供するため記録に値すると信ぜられる。

それは微かな震動で始まり、異変を感じた人々はすぐさまやや強い第二の震動で地震と判断しました。雷鳴のような轟音が同時に聞こえ、彼らは屋外へ逃れはじめます。だが、万全を期するにはあまりにも切迫しました。第二の揺れから一分以内に約一分間第三の震動がポート・ロイヤルの根底を襲い、建物の三の二、控えめでも四分の三とそれらの地盤、そこに住む男女の大半が一気に跡形もなく水没したのです。以前の位置には建物が倒壊し粉砕され、近づいても瓦礫の山しか映じません。おそらく建物の十分の一しか倒壊を免れず、それらも破壊されて少数しか安全な居住に適さず、いまだ空き家のままです。港湾の沿岸へ向かうすべての街路もいまや四、六、八尋水面下にあります。ここでは優秀な埠頭のもと、七百トンもの船舶が数々停泊して、船荷を輸送して、高級な店舗や商人の施設も連なり、要人の住む豪華な建築もあって、あらゆる側面でポート・ロイヤルの主要な拠点でした。海に面し、港湾をなす地峡の先端は残存しました。(そこがいまや離れ島となり、築かれていた要塞が地震で倒壊しないまでも、大いに破壊されました。)ポート・ロイヤルからパリスダスに至る地峡全体(ほぼ四分の一マイル)が地震で遮断され、喪失したのです。そこに密集したすべての建物がそっくり水中にあります。水没した地区とおなじく、地峡の全体が断絶して完全に土砂に埋まったため、僅かに引き潮を利用して人々は材木や建具を運んで、立ち直りに努めています。かかる強敵に抗するのが、いかに危険かをご理解頂けるでしょう。

クロンウェルの命によりこの地を占領したとき、將軍ヴェナブルの統率で侵攻した数名の人物、なかでも（ロンドンにいたときから偶々文通を有した）ハルス大佐と話したことがあります。ここに来た時点では当時のポート・ロイヤルは港から離れた地峡のひとつ、あるいは小さな島並のように映じたとき、だれもが申されました。あたかもそれは砂洲の尾根のように伸びて、別の陸地（すなわち陸峡の分枝）とともに水上に浮かび、現在より地面は狭かったとされます。しかし、周知のとおりポート・ロイヤルの立地部分は当初からつねに増大しました。加えてハルス大佐はさらに語られました。ヴェナブル傘下でここを攻めたある知人は、その数年前サン・ジャゴを占領・掠奪したジャクソンのもとで在留し、当時のポート・ロイヤルないしポイントが海により完全に切り離されていたこと、さらには前述の砂洲がなかったと、確かに記憶するそうです。水没した地峡の向側を越えて以前には船舶が航行したと、住民は大抵言います。この憶説を確証できぬものの、大いにありうることでしょう。地震のあと岩壁下の砂地は数エーカー海へ張り出しました。こうした地峡の砂地に人々は重厚な煉瓦の建物を築き、砂の土台に建てられた重量が、倒壊の大きな要因と思われる。建物だけの敷地は崩れます。他方要塞と岩壁のもとでは建物が残りました。

現在のポート・ロイヤルは岩の上に立つと言われます。山岳の異常な割れ目と裂け目が示すように、激烈な地震の勢いに抗しては同じように弱いのです。この土地が砂ばかりだとしたら、地震の勢いによって地盤自体がなぜ消散したり、解体しないのか、また他の部分のようになぜ粉々となり、水中に散らないのか、不思議です。激烈な震動を受けて、人々は膝をつき、地に伏して、逃れるべく通りを駆けました。脚を踏まえるのが困難です。大地が怒濤のうねりのごとく高揚し、膨張します。（奇妙な比喻ながら、だれもがこのように表現するので、敢えて私も做います。）いくつかの家屋が引き摺られ、数ヤード移動しました。建物の多く立ち並ぶ大道は地震の以前に比し倍の広さになったと聞きます。多くの地点で大地が割れて開き、すぐさま固く閉じました。一挙に二百か三百も亀裂が生じ、いくつかで多くの人たちが呑み込まれた、とケリー少佐などから聞きました。地震で胴体を打撃され、圧死した数名もあります。あるいは頭部のみ地上に遺され、あるいはまったく沈没したあと、大いなる増水で打ち上げられるか、永遠に消えました。微小な亀裂もあります、大きなものは広大な建物をも吸い込みます。こうした割れ目から河流が奔出し、非常に高さに噴射してポート・ロイヤルを洪水の危険に曝しました。おそらくこれら地震に伴う亀裂と大地から発する蒸気によって、大気の悪臭と刺激臭をも蒙ります。

晴朗にして紺碧であった天空は、一瞬にして暗雲に覆われ、（あたかも焼き釜のように）赤みを帯びます。これら凄惨な出来事に山岳の破壊から轟く怖ろしい爆音が終始伴いました。地下の空洞からも噪音が伝わり、恐怖に駆られて走りまわる男女は幽霊の様相にして、生ける者よりも死せる者に映じ、この世の終わりただけれしも観念します。同じ運命を辿る家屋の屋根や煙突、船舶とスループのマストが水面に漂うの見るとき、陸地の上がり、残骸の大山でかつての豪邸を想起するとき、さらには被害を受けた多くの建物が倒壊したり、無人のあばら家と化したのを知るとき、津波に呑み込まれた家々が半ば陸地に残るか、屋根のみ留めるのに気づくとき、暗澹たる想いに沈まざるを得ません。しかもとりわけ暗鬱となるのは、海辺に立ち陸峡を見渡し、ほぼ四分の一が完全に沈没したのを認めるときです。豪華な建築を連ねた繁華な大道が、全面水に覆われるのを眺めて、漂流する煙突やいま魚類の住処である荒墟のみ、建設者の意志に背く悲運を感じるのです。

「エスバニア島では地震が頻発し、そのため住民は都市サント・ドミンゴを放棄した。」このように誌すローンは、『ジャマイカへの旅』に付せられた地誌でも『王立協会哲学紀要』に寄稿した一六八八年の証言を再録し、当地の建築についても述べる。「スペイン人がジャマイカで造った建物は、おおむね平屋であって、個々に物置を備えた玄関、応接間、居室等から成る。」大地深くの支柱とともに一階建ての構造は、涼気への配慮とともに地震に対する警戒による。とはいえ、クロンウェルによる占領以降、「イギリス人によって築かれた建物は、英国風に大部分煉瓦造りで、涼気には向かず、地震の衝撃にも抗しない。熱気と臭気の煩わしさを避けるべく、ここでの調理場が通常住居からやや隔てて建てられる。」こうした建物に住むのは白人に限られ、ポルト・ロイヤルでも内陸部でも黒人は別の小屋に收容される。「雑音や悪臭を嫌って、農園主の住居はサトウキビキ畑や作業場から普通離れたところにある。他方黒人の住居は農園主の屋敷から離れ、楕円形の小さな葺き小屋である。ここに彼らはあらゆる調度や備品、すなわち横たわるマット、食品を沸かす土瓶、カップやスプーンを据え、さらにはヤムイモやココバコやジャガイモ、そしてささやかな塩サバとキャラバッシュを置く。」①

〔報告第八〕の前半でも語られるが、三角貿易の要地であるポルト・ロイヤルには、沢山の倉庫や店舗が軒を並べていた。「ジャマイカにおける交易には」とスローンは列記する。「ヨーロッパおよびアメリカに係わるものがある。すなわち草花、ビスケット、牛肉、豚肉、雇人および従僕の衣服、酒類など。」「他方この島から輸出されるのは砂糖、生綿、ジウウガ、羊毛、胡椒」であって、西インド諸島のスペイン人から入手するココナツ

① Sloane, *A Voyage to Jamaica*, pp. xvii-xlviii, lv-lvi.

ツなども含まれる。スペイン人による衣類等の密輸もあり、「ギニアから連行されたり、大農園で反抗した多くの黒人も売られる。彼らはよい売値になるが、懲罰の焼印があると、あまり売れない。」

〔報告第八〕その二

地震の被害が甚大であるものの、ポルト・ロイヤルではある程度建物が残存する一方、総じて他の地域はより激しく揺れました。まさしくここでは激烈な地震のため、人々は脚が地に就かず、四肢を上げてうつ伏せとなり、あたかも大海のうねりにも似た、大地のありえない激動のなかで、転倒し牽引されるのを防いだのです。

全島を通じ耕作者の住居や砂糖工場で破壊されぬものはほとんどありません。パサージュ・フォートでは皆無、リガーネ全体でひとつのみ、サン・ジャゴも皆無と思われる、慎重なスペイン人に造られた平屋数戸がその例外でした。ジャマイカで地震により破壊された建物は五千戸とも言われます。いくつかの地域では大地に大きな亀裂が生じた。北部においては各大農園の中心である所有者会館が陥没し、建物も人間も樹木と裂け目に呑み込まれます。(これらの会館は隣接するものではありません。)これに続いて広大な水面あるいは湖水が千エーカーもの土地を覆い、乾上がったいまは、荒い砂か砂利しか留まらず、樹木や建物などの残骸と痕跡はいささかありません。クラレンドン区では震動の途方もない威力で亀裂と噴射が生じ、海辺から約十二マイルにわたり大量の水が噴き出しました。全島における割れ目ないし亀裂は数千の多きに達します。それらが大抵閉じたあとも、現地で確認できるものもあり、私もいくつか眺めました。とはいえ、もつとも激しい震動に襲われたのは、山岳部と言われます。山岳に近ければちかいかいほど、震動が強烈である、と

一般に信じられます。地震の成因がそこにあるからです。山々は割り裂かれ、切り碎かれます。もとの山並みとはまったく異なる様相に変わり、もつとも破壊されるのはとりわけブルーマウンテンなどの峻峰です。あたかも強敵に抗するがごとく、山々は悪戦苦闘します。最初の震動から二ヵ月以上揺れが続く間に、(強烈な震動がしばしば一時間に二、三度襲うようなときに)、異常にして耐え難く怖ろしい轟音と反響が耳を聳します。あたかもはらわたに引き裂くような凄まじい痙攣を感じたごとく、また自然への(最大と思われる)強敵に残酷さの抗議するがごとく、山々が吼えるのです。この島を原始の混沌に戻すか、すくなくとも新たな形態、当初自然から受けたのと異なる形態に変えるかのように、ここではひとつの山をふたつに割り、かなたではふたつの山を結合してひとつにして、哀れにも狭間の渓谷を埋めます。なかでもタローズでは山間に住むいくつかの家族が遮断され、埋没しました。

山岳から遠からぬ地区ではある家族の全員と一マイル離れた農園の大半が数度の揺れと起伏で埋没しました。ポート・モラン近くでは一日にしてある高峰が完全に呑み込まれたと聞きます。在りし日のその位置が、いまは四、五リーグ以上の大きな湖です。ただし、これらは比較的低い山岳部の出来事でした。いかなる人間も、黒人すらもきわめて稀にしか踏み入れぬ未開の地ではななが起きたかはまだ判りません。そこからの怖るべき轟音や炸裂の気配によって、聳え立つ偉容や広大な森林が剥ぎ取られと思われれます。かつての緑なす展望が、本来の精彩と装飾を失い、不毛の裸地を隠す一片の枝葉すらもないのです。これを見詰めて思慮ある人物は、深い瞑想を続けることでしょう。大きな山頂が崩れたとき、すべて樹木が下へ引き摺られて頂上から麓まで山路が生じたとも証言されます。他のところでは一マイル削られ、裸地になったようです。山岳の巨大な部分がすべての樹木とともに入り乱れて崩潰し、ほぼ二四時間ほとんどの河川を堰き止めました。

そのあとに海岸にいたる新たな河流が出現して、港へは数千トンの木片が流され、なかには膨大な嵩をなして海上を漂い、動く島のように映じたのです。(これらは当地のもつとも学識ある人士の算定による)。海辺で私もそうした巨木をかなり見ました。それらは樹皮や枝葉を剥ぎ取られ、途中の岩石に切り込まれて、奔流の勢いと自体の重量で流れたようです。多数のなかに認めたひとつは、工場で処理されたサトウキビのように圧縮されていました。山岳が以前の高さよりやや低くなったとの感想もあり、島全体が地震で沈下したとの見解もあります。ポート・ロイヤルは一フィート沈下したと言われます。リガーネの各処では地震の前二、三フィートの綱を要した井戸に、それほど長いものが不要になったと聞きます。これによっていわば立証されるのは、陸地が沈下したか、あるいは海が隆起したかで、前者の可能性が高いと思われる。これらは地震の結果であるとしても、水陸の作用にもある程度起因します。ポート・ロイヤル港では(風であるにも拘わらず)大地震のとき海水が突然攪乱して、すぐさま嵐のごとく拡がり、巻き上がる巨大な波濤が停泊する大半の船舶(すべてではない)を錨から切断しました。錨綱の破壊による被害はすべてに及び、小舟やスループは消え去ります。約三百トンの巨大な船を所有する人物はとくに話してくれました。強力な二本の鎖綱をこのとき降ろしていたが、海流の異常な激しさにたちまち破壊され、暴風のさなか自己の船舶も他の船も失うかのように観念し、すぎにそれが鎮まると、以前の静寂さにすべて復したとの由。

また、フィリップス船長によれば、地震ときリガーネの海辺に居合わせた彼と貴紳ひとり、大きな震動によつて寄せる波濤が、陸地より二百から三百ヤード後退し、干上がった海底が出現しました。その海底にはいくつかの魚が横たわり、同行の紳士が駆け寄ってそれらを拾い上げると、一、二分後に波は平常に戻り、海辺のほとんどの行き渡ったのです。タールフーズでは波濤が一マイル以上引き潮となりました。

歿した人数は全島で二千名と思われます。地震が深夜に発生した場合、急拠逃れえたのは非常に少数でした。脱出できた者もおそらく黒人に叩き起されたのです。ジャマイカでの事業と企画は完全に破滅しました。私自身がここに到着してからも数度震動を感じました。最初にして最大の揺れは聖金曜日で、椅子が大きく傾き、辛うじて脚で支えましたが、それでも小さな地震に属したようです。いつも直前か同時に発生する噪音(他の異常も)がその際には感ぜず、以後数度の小地震でときには轟音を聞きました。ときには突風も加わるものの、非常に低い音響であつて、慣れぬ人には風のざわめきか、遠雷の響きと思われるでしょう。土硫黄からなる火繩に酷似して、それらが点火され、閃光を放つように映じます。これに伴う轟音は、風や雷の音と容易に判別でき、舌を上顎について r r と囁く音声に似ます。だれもが戸外に脱出して走り、そこへ揺れと轟きが下方から、まさしく足下から襲つて、震動を一層怖ろしく思わせました。岸辺でも船上でも、陸上でも水上でもあらゆる小さな揺れまで感知された、と証言されます。

風の強い天候ではいまだ地震がなく、風のすくない天候で不安で、実際に地震が起きた、との証言もあります。(ときには異なる場合もあり、いまはそう考えません。)私がここに滞在する以後の地震、および大地震以後に発生したすべての地震については、(奇しくもすべての住民から提供され、)これらの証言に偽りはありません。

雨のあととは比較的揺れが小さいとも観察されます。大地の穴が締つて閉じ、通過と噴出が困難となるからでしょう。

内陸部での地震がときにはポート・ロイヤルにおいて感知されません。また往々にして山麓や山岳地帯の人々のみ感じる揺れも見られます。

大地震このかた海陸風が吹かぬ日があります。逆に以前は稀なるも、ときに夜通し海から陸へ吹くのです。ポート・ロイヤルならびに全島各地で可燃性の硫黄物質が発見され、大地の亀裂から噴出したと推断されます。それらは火に触れるや、蠟燭のようにとり、燃えました。

地震の原因はなにか、あるいはいかなる経緯でその成因が地底深く潜むのか、賢者は推断できるでしょう。だが、まず十五秒ほど揺れ、ついで六日、七日、十日と停止し、そのあと再発してしばしば震動するのはなぜでしょうか。また、地震が静穏な天候のもので起こり、強風や降雨の天候では滅多に生じないことは、厳密な観察から確かですが、その原因を解くのも難題であります。カリブ海諸島のひとつ、サン・クリストファーはこれまでしばしば地震に襲われ、可燃性物質が山岳から噴出しましたが、最近では止つています。そうした噴出がなおも懸念されますが、用心が不要になれば幸いです。最初の激烈な爆発のあと、震動は力を弱め、徐々に衰えたと思われます。以前からの音響も、ときたまかすかに聞こえる程度で、まったく止むことが大いに期待します。

大地震のあと人々は港の船舶に避難し、多くはそこで二カ月過ごしました。その間激しい震動がときには一時間数度にも再発し、地底からの怖るべき噪音と山岳の絶えざる破壊と崩潰を聞えて、彼らは陸地へ戻ろうとしません。キングスタウン(やキルコウン)へ逃れた人々もあり、そこではまず地面の浄化と粗末な食物の給与がなされて、大枝から成る小屋に入ります。しかし、そこでは地震後の異常な大雨を凌げず、医薬と必需品を待ちつつ濡れたまま横臥し、無惨にも相繼いで息絶えました。(大地震の数多亀裂から有害な蒸気が奔出し、これに害されたと思われる)疾患があまねく全島で見られ、病状を訴えぬ被災者は少数です。島の各地において総計三千人が侵されました。キングタウンが最多であつて、不健康な地と言えます。海陸風

が吹くと、沢山の遺体がときには百から二百の群をなして港より港へと漂流し、当地を一層有害にするので
す。

以上今次の地震について可能なかぎり最善の記録を提供しました。数名の方々から聴取したのですが、
慎重を期して現実にして真実なる事柄のみを執筆したと存じます。①

① A Letter from Hans Sloane, *op.cit.*, pp.79, 89-100.

第二章 聖職者ヒースのポート・ロイヤル地震証言

一六五五年ジャマイカを占領したベン＝ナブルス両将軍の共和国軍には七人の従軍牧師が同行していた。「ス
ペイン人が支えるローマ教会のバビロンを撃破せよ」という護国卿クロンウエルの指令をうけて、これら聖職者
たち任務は、まず「軍隊に蔓延る極度の貪欲、傲慢と自負、乱雑と墮落、冒瀆と邪悪を」根絶することであった。
過酷な環境のなかで数カ月のうちに彼ら死亡したが、まもなく七人のクエーカーがバルバドス島から移住する。
占領後の三十年間に九つの教会が設立され、「任命された聖職者が住民の出生と結婚と葬儀に立ち会い、聖具室
の管理者と公道の巡察者でもあった。」王政復古以降は国教会と異なるキリスト教徒が退けられる一方、「民衆
の間で激増する無神論と不信心を抑圧することが強調される。①
自然学者スローンがジャマイカを去って三年後、聖職者エマヌエル・ヒースがポート・ロイヤルの主任司祭と
して着任し、まもなく巨大地震が勃発する。

ジャマイカ＝ポート・ロイヤルにおける最近の怖るべき地震の全報告

―当地の聖職者によるふたつの書簡―

① Gardner, *op.cit.*, pp.87-88, 92.

一六九二年六月二二日

親愛なる友よ！

この島の大震災については、新聞と書簡を通じご存じでしょう。本月七日怖るべき地震が全島を襲い、ほとんどの住居、教会、砂糖工場、水車小屋、橋梁を倒壊させました。岸壁と山岳は引き裂かれ、あらゆる大農園が破壊されて水没するなかで、畏怖すべき神の審判でポート・ロイヤルこそっとも厳しい裁きを受けたのです。当地における震災の経緯をより委細に報告し、私自身の望みなき危急と奇蹟的なまでの救済についてお知らせします。

六月七日木曜に私は教会での祈祷と朗唱に行きました。ポート・ロイヤルの主任司祭として着任して以来、きわめて墮落して不信心な人々のために毎日それを行っていたのです。そのあと教会近くの会所、貿易商たち行きつけの店へ寄りました。新しい総督が着任されるまで、代理をされる会議所会頭も来ておられました。この方は話しかけられ、正餐前の一杯としてニガヨモギのワイン一杯を私に勧められます。とりわけ親しい友人なので私も応対します。彼はパイプ・タバコに点火し、長々と話し始めました。それが済むまで離れ難く感じ、昼食を招かれたルデン大佐の邸宅へ行くのを躊躇します。実は最初の震動によってこの邸宅が陥没し、大佐の妻と家族、昼食を共にする来客も水没したのです。そこに赴いておれば、私も歿したでしょう。会頭のパイプ・タバコに話を戻します。それがまだ尽きぬうちに、足下の地面が揺れ動くのを感じ、「閣下、いま！」と叫びました。慎重な方なので、慌てず即答されません。「落ち着いて！すぐに終わりますよ。」だが、震動は増すばかりで、教会と塔が倒れるのが聞え、私たちも即刻脱出します。すぐに会頭を見失い、みづからはモルガン要塞を目指しました。そこには大きな広場があつて、建物の崩壊を避けうらと思つたからです。しかし、辿り着くまでに目にしたのは、大地の亀裂が大勢の人たちを呑み込む光景、要塞を越えて怒濤が押し寄せる光景でした。かくして私は脱出の意志を放棄し、わが家へ帰って安らかに死を迎えようと決意します。そのため狭い街路をいくつか駆ける抜ける際に、両側の家屋と障壁が崩れかかり、靴先へ煉瓦も飛びますが、無傷で済みました。わが家へ着き、すべてが元のままで、居室の美しい絵画もひとつとして落ちてません。バルコニーへ出て、われらの街路で倒壊した家屋も、ひび割れた地面もないことを知りました。私を見つけた人たちは、「こちらへ来て、一緒に祈ってくれ、」と叫びます。街路へ出ると、だれもが私の衣服を掴み、抱擁しました。彼らの恐怖と厚誼に息詰まる思いで、やがて跪き大きな輪になるよう指示します。こうして陽光と礼拝の熱気のなかで、用意された椅子を利し、彼らと一時間ほど祈祷と説教を行う間に、

大地は終始大波のように揺れ動き、祈祷する私も辛うじて座位を支えるほどでした。

こうして半時間以上人々を前にして彼らの罪過や忌まわしい背徳を説明し、改悛を切に勧めていると、数名の貿易商がやって来ました。彼らは港でなんらかの船に乗るよう促し、私に飲物を呉れて、そこへ運ぶ小舟を用意したと言います。完全に埠頭が海流に呑み込まれ、付設された煉瓦作りの建築、大半がチープサイドのそれと同じように豪華な建築とそこへ通じるふたつの通路も水没したのを目撃しました。水面の高さまで頂上が沈んだ建物からまずカヌーへ運ばれ、さらに細長い小舟でシャム・マーチャント号と呼ばれる船舶に乗りました。無事であった会頭とここで再会し、彼も私の無事に歓喜したのです。その夜もほぼ毎時間余

震が発生して眠れず、船内のあらゆる銃砲が軋り、響き続けました。①

ジャマイカ地震の社会的・精神的影響に関する精緻な論文「ポート・ロイヤル地震と十八世紀ジャマイカにおける綺譚」において、アメリカの研究者マシュー・ムルカヒーは、つぎのように述べる。「イギリスと英領植民地とを結ぶ合法的貿易、さらにはスペイン領南米への非合法貿易やスペイン系の港湾と船団への掠奪で潤おって、ポート・ロイヤルは王政復古以降の二十年間に急速な拡大と発展を遂げる。一六六二年に戸数三〇〇にして、五十名のアフリカ人を含む人口七四〇であったこの都市が、一六八〇年には戸数千にして白人二〇八六名とアフリカ人八四五名の人口に増大した。」かくして当地は西インド諸島の貯蔵庫あるは宝庫と評され、あらゆる商品が日々輸入されて、市場も店舗も繁栄する。「岸壁岬の西端にあるジェイムズ要塞とチャールズ要塞より市街は、ルバール要塞と西口たる市門へと伸び、半マイル弱に及ぶ。市門を越えると酒場と墓地が見渡され、その先に公有地たる砂洲が本土へと続く。」②

アフリカとカリブ海とヨーロッパを結ぶ三角貿易の重要な拠点、ポート・ロイヤルの発展と隆盛は、研究者ミ

① *Emmanuel Heath, A full account of the Late Dreadful Earthquake At Port Royal in Jamaica ; written in two Letters from the Minister of that Place. London, 1692,p.1.*

② *Mathew Mulcahy, The Port Royal Earthquake and the Wonders of Wonders in Seventeenth-century Jamaica, in Early American Studies 2003-2018 (Vol.1-Vol16, No.4), pp.397-398.*

ハエル・パウソンとダヴィッド・ビュイセレットの共著『ポート・ロイヤル、ジャマイカ』からも明らかである。「ポート・ロイヤル経済発展の歴史はなによりも貿易業者の歴史である。貿易商は同時に商店の店主や店長であり、多くはさらに農園も有するが、ポート・ロイヤル繁栄の原動力は遠距離交易にあった。」一六六〇年にはタバコ四万ポンド、カカオ一万八千ポンド、砂糖一万九千ポンドが軍艦によって輸送され、次第に砂糖の割合が増す。一六八六年から一六九一年の間は黒人奴隷と生活物資を載せてイギリスとアフリカより、二万八千二トン、五二四〇艘の船舶がポート・ロイヤルへ到着した。①

〔聖職者ヒースの書簡第一〕その二

つぎの日に私は船から船へと訪ね、負傷した人たちや瀕死の人たちを見舞いました。水没した遺体がいくつかポイント岬から漂うのを受けて、葬儀を営みました。イギリス行きの船に救われて以来、それこそ自分の悲痛な職務だったのです。なおも大地が頻繁に揺れ、雷鳴と悪天候も続きました。そのうえ邪悪な者共の跳梁で、当地に留まるのが怖ろしくなりました。大地震の当日夜になるや、私掠船員と呼ばれる卑劣な悪党の一味が、錠の壊れた倉庫や無人の家屋に忍び込み、掠奪や発砲を重ねました。その間も大地が揺れ、倒壊する建物の下敷きに彼らの若干はなつたようです。怖いもの知らずの売春婦も、相変わらず破廉恥で泥酔しています。負傷した人や瀕死の人とともに祈り、子どもを導くため、二度陸に登って、そこでは泥酔や悪態に

多々接しました。かくも甚だしい邪惡に至る人たちを、たとえ役人であろうと、私は許せません。神を讚美し、技倆と力能の限りを尽くして自己の責務を遂行しました。当地に居合わせる大半の方々から聞かれるでしょうが、私はこの破局に即応して説教し、釈義したのです。教会で行った最新の説法では人々の迷妄と背徳が災害を招くことを明らかにし、告解した人は説教というよりも予言に接するようだと評しました。正直のところ、熱情がそのように行動させました。本国では考えもしなかった事柄を、幾度もここの説教壇で披露したのです。あらゆる災害が現出した今次でも、人々の背徳は充分自覚されていません。午前十一時半頃ポート・ロイヤルではわずか三分間にしてイギリス農園経営のもっとも立派な都市、新世界において傑出した富と豊富な物資を有する最良の市場と店舗が、倒壊して微塵に碎かれるとともに、その大半が津波にも襲われ、瞬時に海へ呑み込まれました。倒壊を免れた家屋も日々崩れ、海流に浸されると聞きます。建物の倒壊、大地の亀裂、海流の氾濫によって千五百人が死亡し、わが友である法務官マスクローヴ様をはじめ、憲兵隊長殿や監督書記官殿も亡くなりました。トマス・ターナーの弟ヴィルも歿し、スウィマー様は脱出できたものの、同居人たるワッツ様は行方不明です。さきに述べたとおり、帰国すべくこの船に乗りました。しかし、人々は留まるよう切に私へ懇願し、答えるすべを知りません。ここに居続ければ、多大の苦難を覚悟すべきです。国土は遍く破壊されて変容したいま、小屋で暮らして、パンの代わりにヤムイモやバナナを食べるのに耐えられるでしょうか。ラム・パンチを飲むのも好きになれません。若ければ困苦により耐えうるであろうと、年下の人に手紙を書きました。とはいえ、もしも私がここを去れば、艱苦する人たちを見捨てることとなり、人道に背くとも言えます。そうした非難が自分に向けられるには耐えられません。かくして現在の艱苦に鑑み、あと一年間彼らを助けようと、決意しました。この島の守護聖人、ニナヴィアなる岸壁の近くに、新たな都市を急遽建設し始めました。地震のさなか北側からビトガヴェイスのフランス軍がジャマイカ島を攻撃したのに抗し、これを敗北させ全滅させました。①

十九世紀の初頭に刊行された通史、ロバート・レニイ著『ジャマイカの歴史』には、啓蒙的な見地から「奴隷貿易の廃止に関する諸資料」が収録されるとともに、ポート・ロイヤルの奢侈と頹廢も本文で描写される。「ジャマイカで擁護と支援を受けた海賊は、ポート・ロイヤルを出没の拠点とした。略奪品に好適な市場を見出すとともに、彼らはきわめて派手で奔放に、またきわめて奢侈で放埒に、歡樂する好機をこの地で得たのである。この時期にポート・ロイヤルは世界においてももっとも豪華で、もっとも頹廢した場所となった。彼らは財富を満載して入港し、それが売れ尽すまで出港しなかった。海賊は貿易商や農園主から勇者、親友、恩人として愛顧される。酒場や遊郭では数日居続けて浪費し、その金額は一生豊かに暮らせるほどであった。」② 自然発生的な海賊集団バッカニアから王権に擁護される私掠船の船長に転じたヘンリ・モーガンを事例として、ポート・ロイヤルにおける背徳と頹廢を辿ってみよう。一六七一年モーガンとその一隊は繁栄する港湾スペイン領パナマを攻撃し、金銀、財宝、衣装などの掠奪品を一七四頭の牛馬に積み、六百人の捕虜を連行して凱旋

① Heath, *op. cit.*, pp.1-2.

② Robert Renney, *An History of Jamaica*, London, 1807, p.24.

した。「モルガンのポート・ロイヤル帰還は」とクリントン・V・ブラック著『カリブ海海賊たち』には描写される。「熱烈な歓呼に迎えられ、行政協議会は彼の任務遂行に公式の感謝を決議した。」まもなく彼はチャールズ二世から称讃の言葉を賜り、ジャマイカ副総督に任命される。モルガンが私掠船の船長として本拠にし、行政者として管理する港湾都市「ポート・ロイヤル」には海辺に倉庫が林立し、選り抜きの商品が山積みされていた。生活費は安いものの、家賃が高く、ロンドンの目抜き通り並である。酒場はやたらに多く、住民十名に一軒ずつほどもあった。ここでは破廉恥な邪悪と無処罰の売春が許され、そのため娼婦も殖え続ける。「安全で至便なこの地に商品や奴隷を満載する商船と軍艦がたえず入港した。スペイン勢を攻撃するバツカニアの船もここに来る。「これらの船乗りは砂地の狭い街路、リム街、チェイムズ街、キャノン街などを威張って歩み、売春宿や酒場に入る。そして、懐一杯の宝石や輝くスペイン金貨が、抜け目ない娼婦の財布と肥え太る商人の金庫へ遂には納められる。」

因みにこの著作では前述の自然学者スローンと海賊モルガンの出会いも記述される。「引退した五三歳のモルガンは病身で年より老けおり、飲酒と夜更かしに耽溺した。総督アルベマールの侍医ハンス・スローン卿は、死の直前に彼を診察し、やせ細そり黄ばんだ顔色にして太鼓腹と記録した。モルガンかかりつけの黒人医師もスローンとともに全力を尽くしたが、おそらく肺結核のため一六八八年八月二五日に他界する。その遺体はパリサエドス岬海辺の墓地に葬られ、最期の挨拶としてチャールズ要塞の大砲と停泊中の全船舶が礼砲を響かせた。その四年後一六九二年六月七日襲来した地震によって港の最良地域が水没し、墓地全体とモルガンの墓も消え去つ

た。」①

〔聖職者ヒースの書簡第二〕

一六九二年六月二八日

かの運命の日、生涯におけるもつとも怖ろしい日より、大地はつねに震動を繰り返すので、船の上で過ごしております。昨日もきわめて大きな地震があり、陸地よりも船上のほうが怖くなく感じます。それでも、荒廃せるポート・ロイヤルへ敢えて三度も行って、破壊された家々の狭間で亡き人を葬り、病める者とともに祈り、子どもを導きました。破壊されてもお入れる家屋もありますが、そこは避けてテント小屋で人々に説教したのです。彼らは私の姿に接して歓喜し、説教を始めると激しく泣きました。この畏怖すべき審判を通し、神が人々の人生を改革されるよう祈ります。なぜなら、地上にこれほど罪深い民族はないからです。被災した各地についていくつかの証言を得ました。サン・アンでは千エーカーもの森林地帯が海と化し、そこで営まれるすべての大農園が水没したと聞きます。しかし、最大の被害を蒙ったのはポート・ロイヤルで、すべて街路が亀裂で陥没して、家屋も住民も墜落しました。その若干は海流にふたたび押し上げられ、亀裂

① Clinton V. Black, *Pirates of the West Indies*, Cambridge, 1989, pp.38-40.

〔参照〕クリントン・V・ブラック著、増田義郎訳『カリブ海海賊たち』新潮社、一九九〇年。

から脱して奇蹟的に救われたようです。陸峡のほうへ流されて、上部の亀裂が閉じたため、窒息して死に至る人もありました。頭部だけ出して生き埋めとなり、あるいは犬の餌食となり、あるいは砂塵に覆われて、その悪臭から人々は逃れます。以上悲痛な物語を長々と続けましたが、いかなる凶事がさらに起こるか、神のみがご存じでしょう。山岳地帯では非常な轟音が響き、噴火の可能性も高いとの由、地震以上の破壊が襲うことを憂慮します。自分がここに留まることにも不安を抱き、良心に照らしいつまで己の責務を続けるべきか、この難局で判らざります。

頓首。①

一六九二年ジャマイカ地震に際する聖職者ヒースの救援活動は、つとに同時代の地震史料において傑出した刻苦勉勵として評価された。同年秋にロンドンで刊行された一頁の大型図説『ジャマイカのポート・ロイヤルにおけるもつとも悲惨で怖るべき地震に関する真実にして完璧なる報告』では、紙面の過半をポート・ロイヤル震災の図解に充当し、さらに本文として「クロケット艦長の同年六月三十日付書簡」を収録する。「みずからの船舶も所有物も喪失した」艦長は、この印刷物で港湾都市壊滅の全貌を簡潔に描写したあと、ほぼヒース自身の証言に基づきその献身的尽力を報告した。「当地の司祭ヒース殿は」とクロケットは綴る。「多大の尽力をなされ、船から船へと尋ねて、船上でも陸地でも死者を葬り、子どもを導き、負傷した人や瀕死の人の傍らで終始説き祈

① Heath, *op.cit.*, p.2.

られた。その説教は適切にして迫力に充ち、罪過の怖ろしさを痛感させたので、多くの無法者があらたに入信する。これまで罪を嘲笑した者も号泣し、司祭の説教に接すべく、大勢の人々が群れをなした。かくして各方面から推挙され、だれにも称讃されて、善き羊飼の使命を果たされたのである。」①
聖職者ヒースの地震証言に注目する研究者ムルカヒーは、その宗教的背景についてつぎのように説明する。「かかる破滅の原因についてヒースはいささかも疑っていないかった。ポート・ロイヤルを本拠とする数多の海賊、娼婦、背徳者を罰するため神が下した畏怖すべき審判が地震なのである。ジャマイカや大西洋イギリス圏の同時代人はみな同じ意見であった。」② 非国教徒の牧師トーマス・ドリイトルは著書『地震の解説と悔悟の実践』を一六九三年に公刊し、神の審判を説く多数の典拠を示すとともに、懲罰の事例として一四〇〇年ペルシャ地震、一五〇九年コンスタンチノーブル地震、一六三一年ナポリ地震、等々を挙げた。「これらすべては」とドリイトルは教える。「激烈に怒り給う神が、人々の罪過をただすため地震を惹起された怖るべき事例である。しかもなお人々が反抗と罪過を続けるならば、神の憤怒と嫌悪がいつ止むであろうか。聖なる怒りがさらにどこへ向かい、聖なる御手がどこへ伸びるであろうか。かの悲痛なジャマイカの壊滅、今年襲ったもつとも凄惨な地震を知らぬとでも言うのか。自己の罪過、あらゆる災厄の根源たる罪をわれらすべてに自覚させるべく、神がジャマイ

① Crocket, *A True and Perfect Relation of that most Sad and Terrible Earthquake, at Port-Royal in Jamaica which happend on Tuesday the 7th of June, 1692.*, p.1

② Mulcahy, *op.cit.*, p.392.

カを地震を下された現在、彼方の人々とともに悩むべきではないか。もつともよく悩むこそ、もつとも善き道を見出すのである。」①

① Thomas Doolittle, *Earthquakes Explained and Practically Improved occasioned by the late earthquake on sept. 8. 1692.* London, 1693. pp.120--124.

第二章 ジャマイカ行政協議会の緊急政策と危機管理

一八七九年「ジャマイカの学芸を奨励すべく」首都キングストンにジャマイカ研究所が創設された。この機関に所蔵される膨大な西インド諸島関連史料には一六九二年の巨大地震に係わる文献も若干含まれる。なかでも特筆すべきは、施政の主体であるジャマイカ行政協議会の公文書であって、ここには震災における緊急政策と危機管理が記述される。①

カリブ海におけるスペイン勢力との戦いで功労ある将軍ドレレーは、一六六一年ジャマイカ総督に任命され、同島の司法体制を整えるとともに、補佐機関として行政協議会を設置した。この会議を構成するのはジャマイカの居住者十二名であって、多くは王国軍の将校と農園の所有者をも兼ねる。ドレレーの施策によって住民の意志がある程度吸収され、同島繁栄の基礎が築かれた。②

巨大地震の二週間後行政協議会によりなされた英国宮廷貿易・農園審議会への急報については、ジャマイカ研

① *Institute of Jamaica. online.*

Frank Cundall, *Historic Jamaica*, London, 1915. pp.v-vi, 53-54.

② Long, *op.cit.*, p.12.

Renny, *op.cit.*, p.31.

究所の図書館に稿本が保存され、同研究所司書フランク・クンダルの著書『歴史ジャマイカ』に転載される。

ジャマイカ行政協議会の地震報告

貿易・農園審議会 御中

(一六九二年) 六月二十日、ジャマイカ

リチャード・アンド・サラ号にて

本月七日神は全島に地震を下し給い、この凄絶さは貴審議会に報告すべきものと存じます。すなわち、わずか二分間に島内のあらゆる教会、あらゆる住居、あらゆる砂糖工場が倒壊しました。ポート・ロイヤルでは陸地の三分の二が海に呑み込まれ、すべての要塞と築城は破壊され、住民の大半は無惨にも倒れるか溺れました。全能なる神の審判が顕示され、これにて諸賢からの憐憫を仰ぐ次第であります。こうした混乱のさなか我らは、万事の復旧に全力を尽しました。王国の商船リチャード・アンド・サラ号に乗り込み、悲痛を抑えつつ私事を忘れて連日対応の協議を続けました。為すべき急務は自宅を破壊された貿易商を救済すること、荒墟における掠奪と窃盗を防止すること、環境の混乱から頻発する紛争を仲裁し、喧嘩を処罰すること、漂う遺体を沈め、傷病者を看護することであり、ポート・ロイヤルの破滅によってあらゆる倉庫が消失したいま、地方に貯蔵される必要物資を確保し、充用することも肝要と存じます。①

① Cundal, *op. cit.*, p.54.

ジャマイカ地震一六九二年に関する証言は数すくなく、ソローンによる収録六件を含め、ほぼ十件にすぎない。なかでも救援活動や危機管理を主眼とするものは、聖職者ヒースの精神的救済を別とすれば、「歴史ジャマイカ」に転載される行政協議会の記録のみに尽きる。

これなる報告の後半でとくに注目されるのは、震災下における外敵からの防衛である。軍艦や要塞の破壊に加えて、外国勢力の上陸のも脅かされた。構成員の大半が軍人をも兼務する行政協議会の報告後半につき示す。

貴審議会を篤く尊敬し、とくにお配慮賜りたいのは、いま我らが海陸両面において無力であり、敵の攻撃に曝されることでもあります。陸上ではジャマイカの北部をフランスの部隊が掠奪し、現在これに抗戦しております。

対抗できる戦力を海と陸から出動させましたが、陸上での豪雨と地震、海上での烈風に妨げられ、神護も定かならず、いまだよき戦果を報告できません。その他地震の被害としては、ポート・ロイヤルの埠頭で修復中の王国の軍艦スワン号が、建物の狭間に流されて、銃砲、艦装、錨綱、錨を喪失し、竜骨も破損して修理も必要です。スワン号が出港もできず、危機も脱せぬことを、ネヴィル艦長に強く勧告くださるよう貴審議会にお願いたします。防衛施設では多くの銃砲が水面下約五メートルに沈み、無防備の状態にあります。緑地帯で蔵される小銃は家屋の倒壊で散失し、奴隷に使われる不安も感じます。畏れ多くも国王陛下に貴審議会からお伝え頂きたいのは、この時点で多少とも我々が安堵できるよう、被災によって二分の一から四分の一に低下した砲台の性能をせめて五分の三以上に回復させ、陸軍の兵士四百名ないし五百名とあらゆる武器・

装備も堅持されることです。艱苦する当地の必要に相応しく寛仁にして慈愛深き総督を派遣して頂くよう貴審議會に懇請します。・・・

〔追伸〕 ジャマイカ島北部に上陸したフランス勢力に抗し、スループ船を従え主導した王国の軍艦ゲルンゼイ号は、難なく入港して多大の戦果を収めました。敵軍の船舶を焼尽し、スループ船で逃亡した十八名を別として、水陸で全員を捕らえ、殺害しました。①

一六九二年の震災に直面して行政協議会は、ポート・ロイヤルからキングストンへの首都移動を決定した。前述のクンダル著『歴史、ジャマイカ』には、遷都に関する行政協議会の緊急政策がどのように記述される。

ポート・ロイヤルを壊滅した地震のほぼ二週間後、ジャマイカ行政協議会は新たな都市を建設すべく、ピーストン大佐の地所二百エーカーの検地を命じ、四日のちイギリス在住の同大佐に二百エーカーの代償千ポンドを支払うよう指示した。〔中略〕さらに七月二一日セント・アンドリュースに新たな都市キングストンを建設する法規が起草され、すべての土地購入者は五十ポンドを課金として三年以内に建物を造るべく定められた。その課金は病院の新設に充当される。

以下一六九二年八月九日付行政協議会の記録を抜粋する。

① Cundal, *op. cit.*, pp.54-55.

◇ポート・ロイヤルのいかなる土地所有者も沿岸には一棟を超えて構えてはならぬ。

◇ポート・ロイヤルのいかなる住民をそこに一棟を超えて構えてはならぬ。

◇ポート・ロイヤルの土地所有者は三棟を超えぬかぎり、これまでと同数の棟を新たな都市に設けるよう命じられる。

◇本行政協議会は次週火曜日キングストン市のアン・ロウダー邸邸宅で会議を開き、同市での建設を希望する土地所有者およびポート・ロイヤル住民の相談を受け、必要な情報をも提供する。

同年八月十六日行政協議会はキングストンで会議を開き、当地に市場を創設し、エドワード・イーマンスを総務として毎日これを開くよう命じた。また、海運主任および関税総括人にはトーマス・クラーク、公報責任者にはデダツス・スタンリイが暫定的に任命された。①

〔未完〕